とある。ここで舟に乗じてというのは、城内川の水路を下ったということと思われる。この水路は慈眼山に近い位置で花月川から取水し、豆田の東から南をとおり、明王寺の傍を通り友田地区に抜け三隈川に通ずる用水である。この水路は豆田の物資を三隈川を通じて筑後方面に流す運河の役を果たしたものである。淡窓はおそらく豆田港町の船付場か弟棣園の家のあった現明王寺あたりで小舟に乗ったのであろう。この用水を下ると、ほどなく黒男祠の傍らを通るのである。そして黒男祠に行った時は多くの場合、すぐ近くにある門弟の児玉茂邸に寄っている。「日記」には

・文化十五年（一八一八）

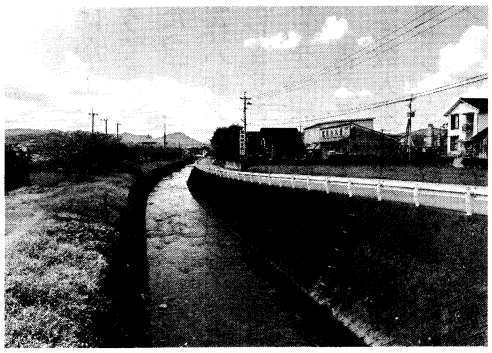
四月二十七日　東海。宗寧。告別。午時赴児玉茂宅。尋二十四日完吾宅会也。会者。慈観。舘林清記。完吾。釈恵禅。蒲池久市。三松斎寿中間予興茂完吾。往謁黒男祠。沿水徘徊。日夕観蛍。先諸子帰。

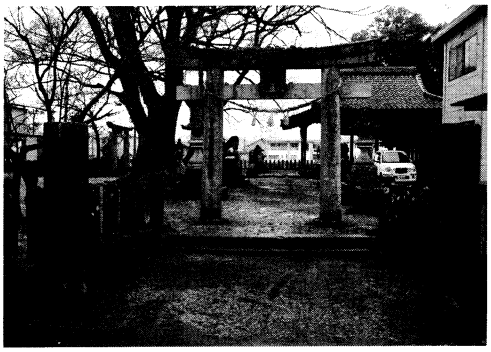
・文政三年（一八二〇）

一月十七日　携頼之。杢之助。詣新原黒男祠。遂訪児玉玄龍。

・文政八年（一八二五）

一月二十日　老子開講。陪厳君謁新原黒男祠。妻及二姒。久兵衛之二女従焉。発行厨於祠中。児玉玄龍来。饋菜果及酒。帰路詣児玉氏。遂謁村人所蔵観音像而帰。是日閑適。唯以天陰有風為累。


玉垂神社に沿う用水路


玉垂神社（黒男祠）

などとある如くである。また、

・文政十一年（一八二八）

三月三日。舟ヲ浮ベテ入江ニ到ル。同行スル者、相良静寿、魚屋直太郎、伸平、謙吉、門生家人凡十余人ナリ。岸上巌下ニ於テ行厨ヲ開キ、夜ニ入リテ帰来レリ。

とあるように、同じ船遊びでも黒男祠には立ち寄らず、直接三隈川に出て、花月川との合流点を下り入江に至ったこともある。

黒男祠の花見と詩会

黒男祠は花見や詩会、そして時に淡窓師弟の散歩の場ともなった。境内にある詩碑は、天保十年（一八三九）二月の詩会で淡窓が詠んだものである。すなわち

・二月十六日。黒男祠ニ於テ詩会アリ。児玉茂、主一、釈五岳地主トナル。此日雨フル。社友一モ至ル者ナシ。唯余塾生数輩ヲ携ヘテ至レリ。詩ヲ賦シ。酒ヲ酌ミ。夜ニ入ツテ帰レリ。余ヵ詩ニ曰ハク。

濠梁西去黒男祠　童冠相携此賦詩
座不十人猶小集　天当二月已良時
杏桜桃李花如約　風雨塗泥客失期
幸有閑身供嘯詠　不辞衣袖滴淋漓

この時の詩会については「日記」には

二月十六日　午時集黒男祠。以詩会也。熊一郎。采蘭。範治。祐之。久吉郎。包含従行。児玉茂父子。釈五岳為地主。社友无一至者。詩成酒罷。日入而帰。是日雨降路濘。帰路尤困。得一律。（略）

とある。このほか「日記」には

・天保八年（一八三七）

三月十二日　晴。與直次。雁三郎。研之介。往謁黒男祠。且観桜花。児　玉茂。携茶及酒至。碓舎八右衛門。荘平亦来会。小酌祠中。移時。予　與直次。雁三郎先帰。二子供飯。